

Feel the JIHS **Plus**



CONTENTS

- | | | | |
|----|--------------------------------------|----|-------------------------------------|
| 02 | JIHS 科学的諮問委員会 (SADB) を開催しました | 09 | タイ王国・チュラロンコン大学病院が JIHS を視察しました |
| 03 | 米国視察団が JIHS を訪問しました | 10 | 第 29 回「日本肝臓学会賞 (織田賞)」を受賞しました |
| 04 | 令和 7 年度感染症危機管理リーダーシップ研修 [長期] | 10 | 上村直実名誉院長、第 23 回「高峰記念第一三共賞」受賞 |
| 08 | JIHS から 2 名の長期専門家派遣が開始となりました | 11 | みんなの心にそっと寄り添うドッグセラピー |
| 08 | 第 42 回日本国際保健医療学会学術大会の大会長に
選出されました | 12 | 6 月 20 日、「JIHS 臨床ニーズマッチング会」が開催されました |
| | | 12 | JIHS の国際庭園 |

JIHS 科学的諮問委員会（SADB）を開催しました

寄稿 危機管理・運営局 局長 武井 貞治

6月3日、「JIHS 科学的諮問委員会（Scientific Advisory Board: SADB）」を開催しました。本会議は、JIHSの機能・能力・取り組みに対し、グローバルな視点から科学的助言を得ることを目的としています。

構成委員には、国内外の健康危機管理に携わる機関やアカデミア、法律分野の専門家など、計11名（欧米5名、アジア2名、日本4名）が参加しました。議長には、ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院学長であるSir Peter Piot氏が選任され、副議長はJIHSグローバルヘルス人材戦略センター長の中谷先生が務めました。会議には、JIHSから国土理事長・脇田副理事長をはじめとする関係者も出席しました。

今回の会議では、以下のようなテーマが議論されました：

- 創薬に関する基礎研究から臨床への橋渡しにおけるJIHSの役割（臨床試験、民間企業との連携など）
- インテリジェンス機能強化のためのデータ利活用、デジタル・トランスフォーメーション（DX）や人工知能（AI）の活用
- 国民や関係者から信頼を得るための効果的なコミュニケーションの在り方

委員からは、各国の経験や事例の共有に加え、組織間でのサーベイランスデータの連携による対策の推進、人材確保（数理モデルやAIなどの専門分野を含む）の重要性など、幅広い視点から建設的な意見が寄せられました。

また、組織統合によって「1 + 1 が 2 を超える」相乗効果への期待や、平時からの市民への情報発信による信頼醸成、誤情報拡散への備えといった、コミュニケーションの課題についても活発な議論が行われました。

本会議を通じて得られた多様な視点と示唆をもとに、JIHSは今後も科学的根拠に基づいた政策立案支援やグローバルな連携強化に取り組んでまいります。



米国視察団が JIHS を訪問しました

寄稿 国際感染症センター 国際感染症危機管理対応推進センター（GIC）

特任研究員 井口 麻里



5月2日に米国視察団が JIHS を訪問しました。同視察団は、「NETEC（National Emerging Special Pathogens Training and Education Center）」のメンバーで構成されており、コロラド大学、エモリー大学、ネブラスカ大学医療センター、メドスター・ワシントンホスピタルセンターなどを代表する 12 名の専門家が来訪しました。

当日は、国際感染症センターの森岡慎一郎医師、野本英俊医師、秋山裕太郎医師の案内のもと、新感染症病棟の施設見学が行われました。感染管理体制や、患者・医療従事者双方の安全を確保するための設備や運用についての説明がなされ、質疑応答も行われました。

また、感染管理マネジメント、人材育成、研究開発ネットワークの構築といったテーマについても、双方の知見を共有しながら、今後の国際的な連携強化に向けた意見交換を行いました。限られた時間ではありましたが、様々な意見交換を行うことができ、大変有意義な時間となりました。

今後も GIC では、他国の感染症関連機関からの視察受け入れや情報交換を積極的に推進し、新興・再興感染症対策における国際連携の強化に努めてまいります。

寄稿 危機管理・運営局 企画調整部 上級研究員 佐藤 瞳



4月～5月

対面研修

地域の感染症危機においてリーダーシップを発揮する人材に必要な知識の深い理解・定着を促すことを目的として実施

求められる リーダーシップとは？

感染症危機時においてリーダーシップが発揮できるよう、平時から常に危機時を見据えて研鑽を積むことが重要であり、こうした認識・行動が感染症危機管理につながることを講師から共有されました。参加者がこれまで出会った「なりたいリーダー」と「なりたくないリーダー」を思い浮かべ、それぞれの特徴について意見を交わし、感染症危機時のリーダーシップのあり方について議論しました。



机上演習

対面研修の学習を踏まえ、感染症危機時に実際にどのように実務に活かされるか学ぶことを目的として実施

どう判断し、どう動くか シナリオを元に考える感染症危機対応

参加者は、「A県A保健所・感染症対策担当課長」という立場で、アジア地域で発生した急性呼吸器感染症の感染拡大を防ぐことを想定した机上演習に臨みました。シナリオは、限られた情報、時間、リソースの中で、優先順位付けの判断、関係機関との連携、住民への情報提供など、次々と意思決定が求められる構成でした。行政の職員と医療従事者が合同で参加したことにより、情報公開をめぐる立場の違いが明らかになり、活発な議論が交わされました。



講師：浦西 由美 先生
(徳島県南部総合県民局保健福祉環境部
<美波> 副部長兼美波保健所次長)

JIHSでは、厚生労働省委託事業として、公衆衛生行政、医療提供体制、感染症疫学や臨床等に関する専門的な知見や経験を有する既存の多様な職種の感染症専門人材に対し、地域における将来の感染症危機への対応においてリーダーシップを発揮する人材として、感染症危機管理に必要な多様かつ分野横断的な知識やスキルの修得や維持・向上を図ることを目的とした研修を実施しています。今回は、令和7年度4月から開始された長期研修の4月・5月・6月の様子を紹介します。

Web サイトは
こちら



外部講義

外部講師による感染症危機の事例やリーダーシップに関する講義とグループディスカッションを実施

「公衆衛生総論」

長年にわたる国内外での豊富なご経験を持つ岡部先生から、公衆衛生の基礎、実地疫学専門家養成コース、急性呼吸器感染症サーベイランスなど、感染症対策について幅広くご講義いただきました。講義では、公衆衛生学の本質を表現した「木だけではなく、葉も枝も見て木を見て森を見る」という言葉とともに、日々の業務において細部に注力しながらも常に全体を俯瞰し、個々の事象と全体の関連性を捉えることの重要性が語られました。また、感染症法前文に掲げられた「人権を尊重しつつ」という基本理念について、ハンセン病やエイズ等の感染症患者等への差別や偏見があった過去の事例から得られた教訓を通じて、感染症対策における人権への配慮の不変の重要性が強調されました。



講師：岡部 信彦 先生
(神奈川県川崎市健康安全研究所参与)

実践研修

感染症危機管理に関わる各関連機関の役割や業務を知り、感染症危機時における分野横断的な調整能力を身につけることを目的として実施

実践研修 On-the-Job Training

各実践研修機関において、1か月から数か月ずつ、合計1年間の実践研修を行います。4月から7月までは、国立健康危機管理研究機構 国立感染症研究所にて研修を実施しています。写真は、研修の一環として行われた篠崎夏歩先生による「高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) サーベイランス」の講義風景です。講師と研修生の間で活発な質疑が交わされました。



実施研修機関

- 厚生労働省（検疫所含む）
- 内閣感染症危機管理統括庁
- JIHS 国立国際医療センター
- JIHS 国立感染症研究所
- 所属自治体の県庁、保健所、地方衛生研究所



6月

実践研修

感染症危機管理に関わる各関連機関の役割や業務を知り、感染症危機時における分野横断的な調整能力を身につけることを目的として実施

研修生の研修記録

2日	感染症アウトブレイク調査の基礎、要約用文献検索	
3日	要約用文献読み込み、今月の研修目的等確認・リスク評価について、EBSについて説明、サーベイランスレビュー	
4日	weekly セミナー「研究の進め方」土橋先生	
5日	サーベイランスデータまとめ発表、リスク評価まとめ準備	
9日	リスク評価まとめ準備、AFP 厚労科研班会議参加、国外 EBS 準備	
10日	国外 EBS 発表、インドネシアのサーベイランス (JICA)、サーベイランスレビュー	
11日	ウィークリースタディ、リスク評価ミニレク	
12日	鳥インフルリスク評価予演会、リスク評価まとめ準備、FETP26 期長期研究中間発表聴講	
13日	リスク評価まとめ準備、数理セミナー	
16日	FETP26 期中間報告会	
17日	3分チャレンジ打ち合わせ、リスク評価まとめ準備、サーベイランスレビュー (3分チャレンジ実施)	
18日	ウィークリーセミナー、EHEC 事前打ち合わせ、リスク評価中間、NCGM 事前面接	
19日	リスク評価まとめ準備	
20日	リサーチミーティング、リスク評価まとめ準備、EHEC 打ち合わせ	* EBS : Event-based surveillance
23日	リスク評価まとめ準備、J-speed 講義	* AFP : acute flaccid paralysis (急性弛緩性麻痺)
24日	リスク評価最終打ち合わせ	* EHEC : enterohemorrhagic Escherichia coli (腸管出血性大腸菌)
25日	厚労省食中毒研修参加	* FETP : Field Epidemiology Training Program (実地疫学専門家養成コース)
26日	フィードバック会、有事の組織体制阿南先生	
27日	リスク評価準備、新型インフルエンザ等対策推進会議傍聴	
30日	リスク評価まとめ発表、感染症意見交換会	

研修生所感より

意見交換ができる環境・関係性づくりは身近な単位から始められる



自治体と実習先では組織としての役割や体制等、異なる部分が多くあります。そのまま所属自治体に落とし込むことは難しいですが、本当の意味で意見交換ができる環境・関係性づくりは身近な単位から始められることがあると気付くことができました。具体的に実践できるのはまだ少し先になりますが、折々で行っている所属自治体への研修報告の中で触れる等により、現状でもやれることをやっていきたいです。

応用疫学研究センター発表会【日時：6月30日 会場：国立感染症研究所】

応用疫学研究センターの八幡裕一郎先生、島田智恵先生のご指導のもと、研修生はそれぞれエムポックスとデング熱のリスク評価に取り組み、6月30日の発表会で成果を発表しました。発表会にはオンラインで応用疫学研究センター長の砂川富正先生もご参加くださり、リスク評価の考え方や要点についてご助言をいただきました。



令和7年度研修生



講師：八幡 裕一郎 先生 (応用疫学研究センター) と令和7年度研修生



講師：島田 智恵 先生 (応用疫学研究センター)

外部講義

外部講師による感染症危機の事例やリーダーシップに関する講義とグループディスカッションを実施



講師：阿南 英明 先生
(地方独立行政法人神奈川県立
病院機構 理事長)



令和7年度研修生と阿南先生

「有事の組織管理」【日時：6月26日 会場：AP 東新宿】

「有事の組織管理」をテーマとした外部講義を開催しました。講師の阿南先生から、「ダイヤモンド・プリンセス号」において新型コロナウイルス感染症の集団感染が発生した時、DMAT(災害派遣医療チーム)の指揮官(※厚生労働省臨時検疫官の発令を受けた上での対応)として医療支援を統括された経験や、神奈川県において緊急医療体制「神奈川モデル」の構築、病床確保に関する県と病院の協定締結、スコアによる適正な入院基準の策定に尽力された経験、また、各ステークホルダーと丁寧にコミュニケーションをとることの重要性について語られました。

研修生所感より

「全体最適」を見据えたリーダーシップ

「どのようにして課題を設定し、戦略を立て、戦術へと落とし込むのか」という全体的な流れと考え方を学ぶことができました。特に印象的だったのは、現状を俯瞰し、先を見据えた課題設定の視点です。ダイヤモンド・プリンセス号でのアウトブレイクや地域でのパンデミックといった具体的な事例を通じ、課題を構造化し、バクトル分解していく思考法を体感することができました。また、戦略・戦術をチームで検討し、共有していく体制の在り方についても示唆があり、自組織における体制構築のヒントとなりました。「すべてを解決するのではなく、全体最適を図る」という姿勢が印象的でした。さらに心に残ったのは、「論理で納得し、感情で動く」という言葉です。感情的な抵抗がある場面においても、ステークホルダーと徹底的に対話を重ね、納得と共感を得る努力をされていた姿勢に感銘を受けました。ステークホルダーとの丁寧なコミュニケーションこそが、合意形成と現場の推進力につながることを改めて実感しました。



研修生・参加者と阿南先生の集合写真

JIHS から 2 名の長期専門家派遣が開始となりました

寄稿 国際医療協力局 医師 野崎 成功真 / 国立国際医療センター 看護師 深谷 果林



タイ公衆衛生省に設置された ACPHEED 設立準備室の担当次官補との面談

ASEAN 加盟国は、地域の公衆衛生対策能力を強化するため、ASEAN 感染症対策センター (ACPHEED: ASEAN Centre for Public Health Emergencies and Emerging Diseases) を設立することを合意し、日本政府はこれを支援するため、2020 年に約 55 億円の資金援助を行ったうえ、2025 年には 5 名の専門家 (医学 / 総括、薬学、獣医学、看護学、業務調整) を派遣しました。JIHS からは、医学 / 総括担当 野崎成功真医師 (国際医療協力局)、看護学担当 深谷果林看護師 (国立国際医療センター) がタイ公衆衛生省に JICA 長期派遣専門家として派遣され、3 か国のカウンターパート*との活動を開始しています (*タイ公衆衛生省 ACPHEED 事務局準備室、疾病対策局、インドネシア保健省国際保健・医療技術政策局、ベトナム保健省疾病予防局、国際協力局)。

2024 年 8 月公開の「厚生労働省国際保健ビジョン」に、JIHS と ACPHEED との連携強化が明記されています。感染症対策・公衆衛生危機管理の ASEAN 各国における能力強化が行われるよう、ACPHEED 設立にむけての円滑な組織間調整を専門家一同、支援していく予定です。

第 42 回日本国際保健医療学会学術大会の 大会長に選出されました

寄稿 国際医療協力局 広報情報課



国際医療協力局 人材開発部長 村上 仁

国際医療協力局の村上仁人材開発部長が、2027 年 11 月に JIHS で開催される学術大会の大会長に選出されました。

同学会の事務局は国際医療協力局内にあり、複数の局員が理事や代議員をつとめています。グローバルヘルス関係者が一堂に会する学術大会に向けて、これから準備を進めてまいります。

タイ王国・チュラロンコン大学病院が JIHS を視察しました

寄稿 国際感染症センター 国際感染症危機管理対応推進センター
特任研究員 高木 香苗



6月12日、タイ王国のチュラロンコン大学小児感染症・ワクチンセンター（Center of Excellence for Pediatric Infectious Diseases and Vaccines, Chulalongkorn University）の准教授をはじめ小児科医師、看護師、教育担当、そして、HIV カウンセラーなど7名が、東京で開催された第10回アジア太平洋エイズ重感染症会議（Asia Pacific AIDS Co-Infections Conference 2025）参加に合わせて、JIHS を訪問しました。

国際感染症危機管理対応推進センター運営室長の松澤幸正より当センターの国際連携などの取組みについて、そしてAMR 臨床リファレンスセンターの松永展明室長より日本での薬剤耐性（Antimicrobial Resistance:AMR）に対するAMR 臨床リファレンスセンターの役割や業務、日本全国を対象にしたAMR サーベイランス方法と管理について発表がありました。

トラベルクリニック視察では、国際感染症センターの山元佳医師がワクチン接種の状況やワクチンの管理方法、渡航者の健康サポートについて説明し、両国の肺炎球菌ワクチンのルーチンワクチン導入についての意見交換が行われました。

エイズ治療・研究開発センター（ACC）では、臨床研究開発部長の照屋勝治医師がACC 外来における診察の流れを説明しながら、診察情報の管理方法、カウンセリングルーム、服薬指導室、吸引室などを紹介しました。訪問者からは患者との接し方やプライバシーへの配慮の方法がとても参考になったとの感想をいただきました。また、タイではAMR 分野をさらに強化する必要があるため、今後、AMR リファレンスセンターと連携していきたい意向が示されました。当センターでは海外の機関とパートナーシップを築き橋渡しをしながら、世界の健康安全保障に貢献してまいります。



第 29 回「日本肝臓学会賞（織田賞）」を受賞しました

寄稿

肝炎・免疫研究センター 研究センター長 考藤 達哉

この度、第 29 回（2025 年度）「日本肝臓学会賞（織田賞）」を受賞いたしました。伝統ある織田賞を受賞し大変光栄に存じます。織田賞は、1996 年 11 月、織田敏次肝臓学会名誉会長が勲一等瑞宝章を受賞されたこと記念するとともに、本学会への貢献を讃えるべく、1997 年に設けられました。毎年、肝臓学に関する国内の優れた研究者、研究グループを対象に受賞者を選考し、2024 年度までに 25 人と 1 グループが受賞しています。受賞研究課題は、「ヒト免疫研究による肝疾患病態の解明と臨床応用」です。これまで、一貫して臨床検体を用いて肝疾患の病態を免疫から解明し、診断・治療法を開発することを研究の目標としてまいりました。今後も織田賞受賞の名に恥じないように研鑽を積んでまいります。ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



第 61 回日本肝臓学会総会での受賞記念講演後に肝疾患研究部の現役・卒業生の皆さんと（右から 5 人目が筆者）（令和 7 年 6 月 6 日）

このだい通信



上村直実名誉院長、 第 23 回「高峰記念第一三共賞」受賞

国府台医療センター上村直実名誉院長に 2025 年度（第 23 回）「高峰記念第一三共賞」が贈られることが決まりました。上村先生は 2010 年から 2018 年まで同センターの院長を務められました。

第一三共賞は、2003 年に公益財団法人第一三共生命化学研究振興財団によって創設され、生命科学、特に疾病の予防と治療に関する諸分野の基礎的研究並びに臨床への応用的研究の進歩発展に顕著な功績をあげたことに加え、現在も活発な研究活動を行い、今後の一層の活躍が期待できる研究者に贈られる賞です。「高峰記念第一三共賞」は今年が第 23 回で、2024 年までに NCGM および JIHS に所属していた門脇孝元理事（2 型糖尿病の分子機構解明）や満屋裕明研究所所長（AIDS に対する治療薬の開発）が受賞しています。

臨床研究の業績による受賞は今回の上村先生が初めてです。受賞理由は、ピロリ菌によるヒト胃癌発症に関する臨床的研究において、「ピロリ菌感染が胃癌の原因であること」（NEJM 誌 2001 年）および「除菌治療により胃癌の発生を抑制する可能性」（CEBP 誌 1997 年・The Lancet 2008 年）を世界で初めて報告した功績によるものです。



国立国府台医療センター
名誉院長 上村直実

高峰譲吉とは？

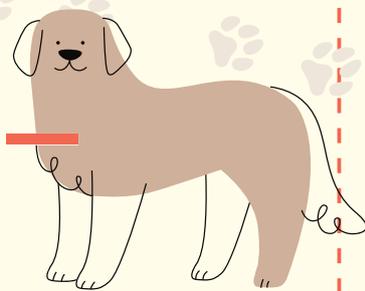
高峰譲吉（たかみね じょうきち）
富山県高岡市生まれ。1854 ~
1922 年。36 歳で渡米し、世
界初の消化酵素薬「タカジア
スターゼ」とホルモン「アド
レナリン」を発明した化学者。

▼ プレスリリース



みんなの心にそっと寄り添う **ドッグセラピー**

～病院からの支援で、年4回の開催が決定！～



寄稿 こどもの療養環境に関するワーキンググループ一同

6月10日、日本レスキュー協会のハンドラーさん達とセラピードッグのハッピーとみらいが訪問し、6東小児病棟で2回目のドッグセラピーが開催されました。ワンちゃんと会えることを心待ちにしていた子ども達は、“ワンちゃんと何をしようかな？”とスタッフと相談し、たくさんのドキドキとわくわくを胸に当日を迎えました。



前回、車いすで遠くから見学した男の子は、自分の足で歩き、ワンちゃんのリードを引きお散歩をしました。はじめは手に触れることにもドキドキだった子ども達も、ワンちゃんとふれあうなかで、「お散歩してみたい！」とやってみたい気持ちが膨らみ、「お手ってできる!？」と子ども達からの素敵な提案や発信もたくさん聞かれるようになりました。

ハンドラーさんからワンちゃんの体重を聞き、「抱っこできるかも…」「抱っこしてみたい！」と、お部屋に戻る前には交代でワンちゃんを抱っこし、一人ひとり“私とワンちゃん”の時間を楽しみました。そして、お友達がワンちゃんとふれあうひと時をそばで見守る子ども達の間にも、ゆったりとした時間が流れ、あたたかな交流が生まれていました。

ワンちゃん達へ「またね～」と笑顔で手を振る子ども達と、キラキラした瞳でしっぽを振るワンちゃん達の間には、見えない絆が生まれていたように感じます。

ワンちゃんとのふれあいは、子ども達やご家族、スタッフの心をほぐし、“また会える楽しみ”が明日への頑張りを支えてくれます。

小児科を超えた他部署、多職種の皆さまのお力添えにより、継続開催が叶いましたことに心より感謝いたします。

日本レスキュー協会

<https://www.japan-rescue.com>



6月20日、「JIHS 臨床ニーズマッチング会」が開催されました

寄稿

臨床研究センター 産学連携推進部 医工連携室 室長 栗村 尚子

「JIHS 臨床ニーズマッチング会」は、JIHS、東京都及び東京都医工連携 HUB 機構が連携し、職員からの医療現場の課題（臨床ニーズ）を企業と共有し、共同研究が製品開発につながるためのマッチングの場です。国際医療センター、国府台医療センター、看護大学校をはじめ、様々な職員が参加しています。通算 19 回目となる本会は、統合後初めての開催となりました。国立感染症研究所の方も初め



当日の様子

てご参加いただき、医師・看護師・放射線技師等の多職種 16 名の JIHS 職員から 18 件と例年より多くの臨床ニーズが発表されました。3 分の発表と質疑応答を時間厳守していただき、限られた 2 時間で活発な議論がなされ、企業からの面談依頼も既に来ています。この機会から、企業との共同研究が行われ、試作品・製品が生まれます。これまでに丸岡豊先生ご提案の臨床ニーズから「骨に描けるペン」等 12 の製品が誕生しました。



flowers in the kokusai garden

当機構の敷地内にある「国際庭園」は、来院・入院される皆さまの憩いの場として親しまれています。この庭園では、長年にわたりボランティアの皆さんが季節ごとの花の植え替えや草むしり、丁寧な手入れを行ってくださっています。年間を通してさまざまなお花が咲き誇る中、とくにあじさいやひまわりは見頃を迎え、訪れる方々の目を楽しませてくれました。お越しの際には、ぜひ足を止めて、花々の彩りに癒されるひとときをお過ごしください。



企画・発行
国立健康危機管理研究機構 広報管理部
〒162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1
TEL : 03-3202-7181 (代表)
URL : <https://www.jihs.go.jp/>



バックナンバー
こちらから
ご覧いただけます

